

明治實業讀本 卷五

教科書文庫  
4  
810  
44-1909  
2000054291

43338  
教科書文庫

4  
810  
44-1909  
20000  
54291

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

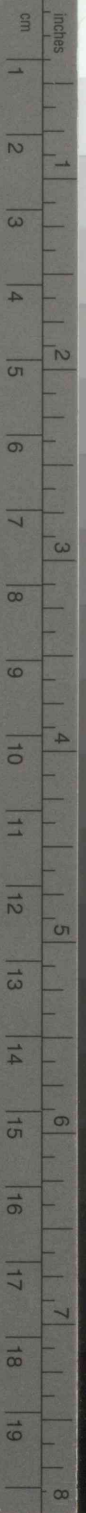


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室  
中央図書館



明治實業讀本 卷の五

目次

一	我國の實業界	一
二	世界の一大橋	六
三	泊天草(漢文)	九
四	宣戰の詔勅	一〇
五	三つの手紙	一三
六	蒙古來(漢文)	一七
七	富士登山	一八
八	我國の農業	二三

目次

375.9  
I221

教科書文庫  
4  
810  
44-1909  
2000054291

明治實業讀本

東京 同文館藏版

文部省  
實業學務局  
泉屋清次郎  
中村康之助  
共著

広島大学図書  
2000054291



九 田中平八(その一)……………二七

一〇 田中平八(その二)……………三一

一一 我國陶器(漢文)……………三五

一二 石炭瓦斯(その一)……………三六

一三 石炭瓦斯(その二)……………四〇

一四 越後より東京に……………四四

一五 航海……………四八

一六 外來物産(漢文)……………五一

一七 公の禮儀……………五二

一八 相模灘の落日……………五八

一九 北海炭礦(漢文)……………一六

二〇 佛國の良農村マローサン……………六三

二一 高德題「櫻樹」(漢文)……………六九

二二 四季折々……………七〇

二三 信用組合……………八〇

二四 愛日(漢文)……………八四

二五 巴里の美術館……………八六

二六 海水浴(漢文)……………九〇

二七 地球の未來……………九一

二八 地方政治の一斑……………九七

二九 希望……………一〇二

明治實業讀本 卷の五目次終

明治實業讀本 卷の五

一 わが國の實業界

輕視

願使

封建時代にありては、實業の輕視せられし事、眞に甚しかりき。農夫は百姓と侮られ、工匠は職人と輕んぜられ、商估は町人と卑められ、殆ど武士の願使に任ぜられしかば、農工商の業は微々として振はざりき。維新以來、漸く實業の貴重にしてこれを振起すべき必要を悟り、政府も亦、大にその獎勵に力をつくし、かば、爾來、漸次發達して、遂に今日の如く、稍、歐米と肩を比するに至りしは、誠に喜ぶべきことなり。

振起  
萎微

それ、國を富ますは實業にあり。實業盛ならざれば、兵備を完成せしむること能はず、學術を振起せしむること能はず。百般の施設、皆萎微振はずして、國漸く衰ふるに至らん。實に、實業の振興は富國の急務にして、國家、人民の一日も忽にすべからざるものなり。

農は、古來、國の大本と稱せられ、その敬重獎勵せられしこと、遙に工商の上に出でたり。これ、蓋、往時わが國政府の歳入は、専ら米穀よりこれを徵し、工商は殆ど納税の義務を有せざりしによることならん。現今、なほ、農夫の數は全國人口の三分の一に居り、田畑の數これに準ずといふ。園藝、養蠶、牧畜等の業は、農家の副業にして、その利益殊に多きもの

園藝

頻々

なれども、なほ未だ盛ならず。

工業は、概ね規模狭少なる手工にて、歐米諸國の如く、大機關を運轉するもの極めて稀なり。近時、織物、紡績等に機械を利用し、盛に製造するもの頻々起れるは、喜ぶべし。我國の工業は、織物、紡績の外、陶器、磁器、摺附木の製造、製銅、製紙、釀酒、造油等を重なるものとす。

商業の振はざるは、工業に同じ。内國の商業はとにかく、外國貿易の如きは、なほ眠れるが如く、却て横濱、神戸等に居住せる外國人の願使を受け、僅にこれをなすに過ぎざるもの、如し。

抑、國家の繁榮が、貿易の盛否に基くことや大なり。國內

超過  
疲弊

の産業發達せざれば、輸入は常に輸出に超過して、正金の海外に流出すること夥しく、國力の疲弊すること期せずして至らむ。古語に曰く、百戰百勝は勝の勝にあらず、戰はずして勝つ、これを勝の勝といふと。貿易は實に戰はざる戰爭なり、平和の戰爭なり。嗚呼、この平和の戰爭に對する、わが國民の準備果して如何。現今貿易品の重なる物は、生絲を第一とし、絹織物、石炭、米穀、茶、摺附木、陶磁器、銅類、地蓆、麥、稗、眞田等にて、その輸出先は米國を第一とし、英領香港、佛蘭西、支那これに次げり。また、わが國に諸物品を輸入すること最多きは英國にて、英領印度、支那、獨逸、米國等、これに次ぐ。鑛業とは、地中より鑛物を採掘し、またこれに附屬する事

現象

業を總稱するものにて、佐渡の金山、生野の銀山、足尾及、別子の銅山、釜石の鐵鑛、高島三池、幌内等の石炭鑛を、最、著名なるものとす。

漁業は、わが國の近海概ね魚貝に富むが中に、北海道および千葉、靜岡、高知等の諸縣、最、盛なりとす。又、近時、遠洋漁業を企つるもの輩出して、南洋に、北海に、朝鮮海に、漸次日本人を見るに至れりといふ。これ、豈、國家の爲に喜ぶべき現象にあらずや。

嗚呼、わが國は天與の富國なり。土地豊饒にして農業に適し、海陸の産物豊富にして工業に宜しく、位置、東西洋の中央に位して南洋に對し、世界の要路を占めて商業に適す。

且、山には、鑛産豊かにして木材多く、海には魚介藻類盡くることなし。嗚呼、何ぞこの富源を空うして可ならんや。富國の策を講ぜずして可ならんや。 (公民讀本)

## 二 世界の一大橋

エヂンバラを距る八哩の田舎にフォス橋といふ橋あり。途、ローズベリー卿の邸を過ぐ。邸前に大門あり、曾て具氏の入りし故を以て、グラッドストーン門と名づく。邸は幽靜閑雅なる一區の森林にして、これをダラムネーパークと稱す。八哩の長途、平坦、砥の如く、一哩毎に石壇を築き、鐵柱を廻らしたる哩程標を建つ。一條の長途將に盡きんとする

閑雅

ところ、眼下にフォス港を瞰み、忽にして一大鐵橋の恰も空天に長虹を懸くるが如きを見る。

風濤

抑、この橋たるや、近時工業の進歩を代表せる大工事にして、米國ブルクルイン鐵橋より長きこと四分の一、即、一哩四分の一にして、實に世界の長橋なり。該工事の、最、斬新なる一點は、其、風濤に堪へて極めて堅牢なるカンチレベル主義を採り、未曾有の大規模を以て適用せるに在り。橋板の鋼鐵五萬一千噸、外に石材コンクリート等を使用すること尠からず。フォス灣内のインチガルビー島を利用して、この長橋を架したるが、島の兩邊二百呎の深さにして、柱を埋むること頗る困難なりしも、サー、ジョン、フォレル、及、サー、ベン

考案

ジャミン、ペーカー兩技師の考案に依りて、之を成功したり。この工事に就きて、最、偉功ありしは、技師サー、ウイリヤム、アロル氏なるを以て、世人、氏を稱して、フォス橋の豪傑といふ。海岸に到れば、見物船の客を引くもの、前後相呼ぶ。試に六片を拂つて乗船すれば、かれこれ兩岸の間を往復し、甲板上に在つて鐵橋の構造を目撃せしむ。船中、琴を弾じて錢を乞ふものあり。橋は近づき見るに隨ひ、益、廣大壯麗、實に目を驚かす許りにて、その蜿蜒として横はる様、自ら文明國の眞景を寫して壯快極りなし。(鎌田榮吉)

蜿蜒

三 泊天草

雲耶山耶吳耶越。  
萬里泊舟天草洋、  
瞥見大魚波閒跳。

水天髣髴青一髮。  
煙橫蓬窓日漸沒。  
太白當舟明似月。

(賴山陽)

故 古事熟語

骨肉之親 (呂氏春秋)

莫逆友 (莊子)

腹心友 口頭交 (成語考)

管鮑交 (十八史略)

心同いふ  
直るカ  
コト

手  
カ  
コト



四 宣戰詔勅

明治三十七年二月十日、宣戰の大詔は、發布せられたり。今、左にその全文を掲げん。

天佑を保有し、萬世一系の皇祚を踐める、大日本國皇帝は、忠實勇武なる汝有衆に示す。

百僚有司 朕茲に露國に對して戰を宣す。朕が陸海軍は、宜く全力を極めて露國と交戰の事に従ふべく、朕が百僚有司は、宜く各其職務に率ひ、其權能に應じて、國家の目的を達するに努力すべし。凡、國際條規の範圍に於て、一切の手段を盡し、<sup>盡</sup>違算なからんことを期せよ。

交誼

惟ふに、文明を平和に求め、列國と交誼を篤くして、以て東

國際條規

百僚有司

親厚

鞏固

其事

洋の治安を永遠に維持し、各國の權利利益を損傷せずして、永く帝國の安全を將來に保障すべき事態を確立するは、朕夙に以て國交の要義と爲し、且暮敢て違はざらむことを期す。朕が有司も亦能く朕が意を體して事に従ひ、列國關係年を逐うてますます親厚に赴くを見る。今不幸にして露國と釁端を開くに至る、豈朕が志ならむや。帝國の重を韓國の保全に置くや、一日の故に非ず。是れ兩國累世の關係に因るのみならず、韓國の存亡は、實に帝國安危の繫る所たればなり。然るに露國は其の清國との明約及列國に對する累次の宣言に拘はらず、依然滿洲に占據し、益、其の地歩を鞏固にして、終に之を併吞せんと

妥協

折衝

屈從

す。若し滿洲にして露國の領有に歸せんか、韓國の保全は支持するに由なく、極東の平和亦素より望むべからず。故に朕は此の機に際し、切に妥協に由て時局を解決し、以て平和を恒久に維持せむことを期し、有司をして露國に提議し、半歳の久しきに亘りて、屢次折衝を重ねしめたるも、露國は一も交讓の精神を以て之を迎へず、曠日彌久、徒に時局の解決を遷延せしめ、陽に平和を唱道し、陰に陸海の軍備を増大し、以て我を屈從せしめむとす。凡、露國が始より平和を好愛するの誠意なるもの毫も認むるに由なし。露國は既に帝國の提議を容れず。韓國の安全は方に危急に瀕し、帝國の國利は將に侵迫せられむとす。

手紙既に此に至る帝國が平和の文を以て依りておめんとしたる

旗鼓

將來の保障は今日之を旗鼓の間に求むる外なし。朕は汝有衆の忠實勇武なるに倚頼し、速に平和を永遠に克復し、以て帝國の光榮を保全せむことを期す。

### 五 三の手紙

#### 一、貯金を勧むる手紙

この度は御都合よく某會社へ御勤めの事に相成り候由めてたく存じ上げ候今更私共の申上ぐるまでもなきことに候へ共勤儉貯蓄は人生の一大要義と申し候間不慮の病氣その外不時の用意に平素働きて得たる金錢の幾分を郵便局又は銀行に預けおきたきものに候且預け金の利子は

塵も積もれば山となる諺にもれず知らず識らずの間に巨額に相成るものに候私事も數年來給金の内少々つつを貯金し不時の用に備へをり候へば貴家にも自今毎月幾分づつか貯金なされ候様御勧め申上げ候是非共御決行の程祈り奉り候勿々(帝國公民讀本)

決

◎ 二月見に友を招く書

朝夕は漸く冷氣を覺え心地よきかぎり候承れば兄には當時箱根の温泉に御保養のよし私も過日來父と共にこの鎌倉の別莊に出かけ居り候御承知の如く明夕は中秋に候ふが思へば一昨年も昨年も兄と共にさやけき月影を賞せしを今年にかぎりその樂を共にせざるはいかにも残念

に存ぜられ候高根に上るさやけき影溪間に映る清き影さぞかしとは存じ候へども寄せる波に碎くる影を白沙青松の間に眺めむも亦一興には候はずやことに兄には近來和歌に御熱心のよしそれは父の最好むところに候終夜月下にて御相手も致さむとしきりに待ち上げ居り候につき是非御來遊下され度候先は御案内まで早々敬具

(中等國語讀本)

三、友人におくる書

久しく御出席なきは御病氣のためとのみ思ひ居りしに聞くところによればつまらぬ閑遊にその日を送らせられ候趣如何なる御考かは存ぜねど平素思慮深き兄にも似合

しからざること、考へられ候今更申すまでもなきことな  
 がら青年は人生の春に候へばこの折にその培養を怠らむ  
 には美しき采實を收めむことは到底覺束なき事に候はず  
 や然るに身を學藉に列ね居る兄が盛に培養すべき春をよ  
 そにしていはゞ人生の冬に爐邊の閑遊ともいふべき圍碁  
 などに耽り居らるゝは決して策の得たるものには候ふま  
 じこの邊篤と御考なほしの上學校にも御いてなされ餘暇  
 を以て閑遊を試み給ひてはいかゞに候ふらむゆきてかへ  
 らぬは光陰先に立たぬは後悔とも申せば思ひ<sup>た</sup>がへなき  
 やう偏に祈り上げ候一片の友情もだし難くて申し進じ候  
 ことなれば失禮の字句は幾重にも御見ゆるし下されたく

候。三餘雜錄

六 蒙古來

筑海颶風連天黑。	蔽海而來者何賊。
蒙古來、來自北。	東西次第期吞食。
嚇得趙家老寡婦。	持此來擬男兒國。
相模太郎膽如甕。	防海將士人各力。
蒙古來、吾不怖。	吾怖關東令如山。
直前斫賊不許顧。	倒吾檣、登虜艦。
擒虜將、吾軍喊。	可恨東風一驅附大濤。
不使羶血盡膏日本刀。	

(賴襄)

### 七 富士登山

富士登山の路は四途あり。駿河國富士郡大宮口よりするものを「大宮口」又「表口」と稱し、駿東郡須山よりするものを「須走口」と稱し、以上を共に東口といふ。又、甲州谷村を経て吉田よりするものあり、これを「吉田口」又は「北口」といふ。然るに近來、御殿場より太郎坊を経て、東口に合する一道を開通し、登岳の客は、この途を取るもの、最多きに至れり。故に夏期登岳の候、御殿場の繁榮は實に甚しく、白衣道士の群集する景況、身、恰も朝鮮に客たるの想あり。

御殿場驛は、富士山と箱根山との峽間、恰も藥研底的の凹

海拔

處に在れども、その高度は海拔一千四百八十五尺にして、富士箱根の兩火山より噴出せし火山岩屑滿地に布けり。今の東海道鐵道線路は、藥研底を追うて沼津に出づるものなり。太郎坊以上は、玄武岩もしくは富士燒岩と稱し、富士全山を組織する溶岩の屑礫を以て覆はれ、その麓の傾斜緩なる處には、松、落葉松、榎等の疎生林あれども、二合目以上は、植物跡を絶ち、また雜草一莖をも見ず。蓋、傾斜の漸く急に、火山礫また漸く大となり、雪崩等のため砂石轉流してその位置を定めず、草木の宿根すること能はざるに因る。故に仰望寸青の眼を遮るものなく、八朶の芙蓉峯、咫尺の間に望み得べし。

傾斜

圓錐體

抑、富士の形狀は丈山翁が既に評し盡せる如く、倒懸の白扇形をなし、その麓にては、傾斜甚、緩に、五度乃至、十度に過ぎざれども、躋るに隨ひてその傾度を増し、凡そ一万一千尺（八合目）以上は、三十度乃至、三十五度に及ぶ。山側の外形は、直線を以て盡し、中腹、稍、彎曲せり。これ重力作用により、全山その中心に向つて、漸次陷入せるによるものなりといふ。すべて火山は概ね圓錐體をなし、その側面は多少彎曲すれども、その形の完全なるもの甚乏しく、南米のクトバツキシ火山、及、墨西其のポポカテペトル火山の如きは、倒扇狀と稱すれども、わが富嶽の如き好狀態を以て抽立するものなし。これ富嶽が東洋、否、世界第一の名山たる所以なり。富士山

抽立

橢圓形

を遠望すれば、その頂上の稍平かなるが如く、尖截圓錐形の觀あるは、頂上に噴火口を有すればなり。この噴火孔は南北に稍長き橢圓形にして、長徑約一千八百尺、短徑一千六百二十尺に達し、周圍半里餘に及べり。この孔を内院と稱し、道者等の尊崇參拜する所なり。孔内には南縁の獅子岩、東邊より降ることを得べしと雖、火山礫、燒石等、磊落として頗る危険なり。孔底もまた燒石を以て埋められ、その間には所謂萬古の雪を存し、堆積四五尺に達し、岩間よりは電柱大の永柱垂るゝを見る。仰いて孔壁の四周を望めば、燒餘の巉石、矗立削るが如く、崔嵬崩れんとするの勢を示し、その觀甚、豪宕なり。噴火孔の深さは東口拜所より五百四十八尺、

尊崇

崖崑

藕花狀

劍ヶ峯より七百九十五尺なりといふ。火孔の四圍を擁するは、所謂外輪山にして、その高さもの八峰あり。劍ヶ峰、雷岩、志良ヶ嶽、伊豆嶽、成就嶽、駒ヶ嶽、獅子岩、三島嶽、これなり。故に、その狀恰も八瓣の藕花狀をなせり。劍ヶ峰は實に富嶽の絶頂にして、海面を抜くこと一萬二千四百六十七尺あり。これをわが帝國本土の最高點とす。

もしそれ頂上に立ちて曠望を取れば、東海、東山の峰巒は、譬へばそが兒孫の如く、脚底にその高さを競へり。萬仞の嶺上に一たび長嘯すれば、十三州の山河相呼應するに似たり。雲霧時に來りて半腹を吞めば、觀望唯々一白の雲界にして、八荒漠々、天地の間、我身邊以外亦一物あるなし。壯觀

謂ふべからず。(矢津昌永著、地理學小品)

八 我國の農業

漁獲

太古漁獲の業を操ること多かりしは勿論なるべけれど、わが日本民族は夙に農耕の術を覺り、これを營みて生業となせり。田には稻を植ゑ、畑には大小麥、粟、黍、豆を作り、これを五穀としてその生産を食用に供し、楮、麻を植ゑて衣服の料となしたり。但、當時は家畜の肉を食し、乳を飲む風俗なく、またこれを使役すること多からざりしがゆゑ、雞を除くの外、あまり家畜を養ふことなかりしが如し。

就中、米は貴人の常食にして、これを産する稻は重要なる

灌溉

作物なりしゆゑ、これが栽培には、最力を致し、歴代の農政として、最、觀るべきは、稻田灌溉の用のために、諸國に池溝を開かれしことなり。既にして蠶種を漢土より傳へ、楮麻布の代りに絹布を用ふること、貴人の間に行はるゝに及びて、歴朝の勸奨により、蠶桑の業大に普及進歩したり。こゝに於て、養蠶は五穀の栽培とともに、わが農業の重なる要素となれり。

普及

要素

わが建國の當初は、豪族地方に散在し、到る處、人民を使役して農業を営ましめたりしが、大化に至りて、人民は初めて天皇に直隸し、班田收授の制下に均平の惠に浴し、租庸調の規定によりて、稅歛の苛重を免るゝを得たり。然れども農

矇昧

業の規模は、當時より極めて狹小にして、男一人に付き田三反、女にはその三分の二を供せらるゝに過ぎざりき。

建國の大初より應神天皇の御代までは、所謂矇昧に屬す。而してこの御代より以來、世の開明に伴ひ、農業も著々進歩の途にありしが、特に歴代、民を治むる道に心を用ひ給ひ、漢土の諸法を傳へて、農耕の改良を圖られしこと、僂指すべからず。

王綱

然るに、王綱の弛むと共に、大化の制も廢れ、莊園の制下に土地は兼併せられ、農民は豪族に苦役せられ、苛稅に泣くに至りたり。その後、天慶の亂あり。引續トきて、世、平穩ならず、遂には武家の世となり、應仁の亂後、群雄諸國に割據して、天



頓挫

下麻の如く亂れしより、農民はその堵に安んずる能はずして、農業の進歩も一大頓挫をなせり。これを暗黒時代となす。

中興

文祿以降天下漸く一統し、三百年近くの治平と、諸侯の勸奨とは互に相待ちて、こゝに農業は一大進歩をなせり。これを中興時代とす。

隸屬

明治維新は在來の封建制度を打破し、その壓抑を解き、人民は隸屬の羈絆を脱して自由の民となり、土地は無條件に所有となすことを許されたり。これより以降、歐米各國との交通頻繁となりて、作物家畜の輸入を得たるもの多く、栽培・飼養の良法の傳りたるものもまた少からず。わけて農

隆替

學の輸入せられて、これが研究大に進み、農政亦再び大に振ふに至りたるが爲に、農業の進歩發達をなせること尠少ならず。

等閑

これに由りてこれを觀れば、わが國の農業は、その進歩の途に於て進退消長時にこれありて、皇室の隆替とその運命を齊うせる跡あるなり。要するに、わが農業は、皇室の保護誘掖の下に、始めて大に發育するを得たるものなれば、皇室の鴻恩、豈に等閑に附すべけんや。(横井時敬著農業原論)

九 田中平八 (その二)

田中平八は、信濃國伊那郡赤穂村の人なり。天保五年七

村儒

剛膽

月十一日を以て生る。幼名を釜吉といひ、父は福島卯兵衛にして、平八はその第三子なり。村儒某の門に入りて學に就き、幾もなくして、更に同郡坂本町の商人小林某の傭となる。されど、かれ長く碌々として他人の傭人たるに甘んずる者にあらず。剛膽不屈の性、夙に群童を抜くものあり。早く獨立の業を營まんとして、小林某を辭し、尾州より魚を購ひ來り、峻坂を越えて、之を信州に鬻ぐ。偶、田中安平といふ糸商あり。彼の人物を愛し、父卯兵衛に請ひて、養ひて子となす。これ、彼が田中の姓を冒せる所以にして、名も、亦、平八と改め、乃、養父に従つて糸商に従事す。かくて糸商に従事すと雖も、劍道を好んで、毎夜大に之を

別條

研鑽す。蓋、天下の風雲に見る所ありしならむ。當時、徳川幕府の末路、勤王の説四方に起りて、天下騒然たり。而して、かれ、亦、勤王の志あり。文久三年、勢州四日市より、製糸を横濱に輸送せんとして、船に乗ず。海上、颶風起りて、船覆没し、僅に一生を得たれども、貨物の損、失夥しくして、負債、山を成す。先に船中、會、勤王の土伴林三郎に會し、互に國事を談じ、而して共に生命の別條なかりしを以て、かれは、乃、専ら國事に盡す所あらんとし、一旦郷里に歸り、更に出でて、京都に走りぬ。

時に元治元年にして、かれ京都に於て、憂國の傑士吉田寅次郎、久阪玄瑞等に會せしと雖、別に思ふ所あり、武田耕雲齋、

烟眼

筑波山に事を擧げたりと聞き、風を望んで之に屬せしも、志合はず。乃、去りて中仙道に身を隠し、が、探偵嚴にして竟に幕府の捕ふる處となり、鐵窓の下に繋がれたり。蓋、耕雲齋は尊王攘夷を主義とせしに反し、かれは勤王開國説を持したればなり。且、その烟眼、時運の趨嚮を察し、幕府を倒して王政復古を圖ると共に、又、開國の已むべからざるを看破したりしなり。

鐵窓

蝮居

平八、鐵窓の下に呻吟すること數十日。許さるゝに及びて横濱に走りしと雖、身に一錢の資金だもなく、已むことを得ずして、横濱・神奈川間の驛路人夫となり、暫く蝮居せり。然りと雖、雖は囊中に在りてその末を露はす如く、かれ、亦、横

商略

零丁

挽回

濱の商人大和屋三郎兵衛の知る所となり、その手代となりて、洋銀賣買に従事せしに、果せる哉、商略敏にして利を得ること多かりき。かくて、彼は三郎兵衛に依りて多くの資金を得、慶應元年、横濱に兩換店を開始して、獨立の商人となりしが、不幸近隣より失火して、家屋・家財、共に烏有に歸し、且、商業上の行違ひよりして、復、零丁の身となりぬ。されど、かれが忍耐不屈の精神は一難に會ふごとに一倍し來り、間もなく商運を挽回し、慶應三年、錦を着て故郷に歸れり。

一〇 田中平八(その二)

嶄然

諮問

狡獪

辟易  
鑑定

爾來、かれは横濱にありて、貿易商を營み、商運、彌、盛大を致し、嶄然として商界に頭角を現はすに至りしが、その収入の少きに苦める横濱税關の、適、その増加策を諮問せらるゝに、および、平八、乃、同業鈴木安兵衛と謀り、税關の収入の少きは、その價に依つて課税するが爲に、狡獪なる外商が、多額の納税を免れんとして、その原價を偽りて廉となすに由ること、を觀察し、常に十萬金を税關に貯へ置きて、原價を偽りたるものと見れば、直に之を買ひ上ぐるの方法を立て、鈴木と共に五萬圓宛を税關に差出して、この方法を実行し、而して、彼と鈴木とは買上品の鑑定と賣捌とを引受けしに、外商は果然辟易して、原價の實を告ぐるに至り、翌月に及びては、税關

頭角

彰義隊

収入に四倍の増加を見るに至れり。  
かくの如く、かれは商界に頭角を現はして當局者にも重きを措かるゝに至りしと雖、利の爲に勤王を忘るゝもの、非ず。されば、王政古に復し、伏見、鳥羽の戦争となり、更に又上野戦争となるや、商用の出先なるにも拘らず、官に入りて彰義隊と戦ひ、以て勤王の志を全うせり。  
是より、田中平八は専ら商業の改良發達を圖るに従事せり。洋銀取引所を設けて、その所長となりしも、彼なり。明治二年その筋に建議して、通商貿易會社を設け、その肝煎に任ぜられたるも、亦、彼なり。而して、翌年、水道會社頭取となり、更に爲換會社頭取に任ぜられて、貿易發達に力を致し、

瓦斯燈

こと鮮少ならず。且、明治四年、生糸改良會社の創立に盡力し、瓦斯燈設置の發起者となり、己は神戸・大阪・新潟、その他各要地・要港に、支店もしくは出張所を設けて、物産輸出に従事せしが、爾來、益、商業の進歩・商業機關の發達に力め、その筋よりは、彌、重きを措かれて信用厚く、明治六年、横濱港民の代議人となり、東京兜町に米商會を設立して、之が肝煎、出納役に選まれ、同年、公選を以て、神奈川縣第一大區議員に擧げられ、或は東京横濱株式取引所創立に盡力し、或は第一百十二國立銀行創設を發起し、或は兜町蠣殻町兩米會社を合併して之が頭取となり、後、又、田中銀行を起して金融の道を開きしが、明治十七年六月八日、前年來の肺病重きを加へて、藥石その

金融

不歸の客

効なく、五十一歳を一期として、遂に不歸の客となれり。

一一 我國陶器

上古、陶器其製甚粗、類今土器。奈良朝時、僧行基始傳用釉藥之方。後五百年、至鎌倉氏之始、加藤四郎左衛門景正者、遊於宋、研究其術、歸開陶窯於尾張瀬戸。後又四百年、足利氏時、祥瑞五郎大夫、赴明、修其術、及還、開業於肥前唐津。豐臣氏之征朝鮮、肥前鍋島氏擒良工、歸起業其領土。其後、各地陶窯繼興、其技益進、精巧迥出乎支那朝鮮之上、稱爲萬國之冠。陶窯、肥前伊萬里、尾張瀬戸、加賀、九谷、京都、清水、粟田、最著。備前美濃、會津、伊勢、質較下。

通稱

而瀨戸自景正創業凡七百年地舊技熟故其所製色清白而質堅剛價亦頗廉最適衆人需用世呼曰瀨戸物以爲陶器通稱(重野安釋)

故事熟語

志學之年(論語)

而立之年(論語)

夔鑠(後漢書)

一二 石炭瓦斯(その二)

石炭瓦斯は天然に生じて、その作用の人を驚したること、は、内外に珍しからねど、人工にて製造して實用に供したる

雜物

は、西曆一千七百九十二年を初とす。英國コルンオールのウヰリアム、ムルドック氏の發明なり。

石炭瓦斯の製造法は、石炭を蒸すにあるはいふまでも無けれど、蒸したるだけにては、有害無用の雜物多きが故に、之を清淨にする手數多し。左に概要を説明せん。

まづ直徑一尺位、長さ七尺位の耐火粘土を以て造れる、レトルト數多を煉瓦造の竈の上に安置し、其中に石炭を詰め、鐵の蓋をして、竈に火を焚けば、中なる石炭分解せられて、自ら瓦斯を生ず。此瓦斯はレトルトより出でたる鐵管をくぐりて、ハイドリック、メインと稱する大鐵管の中に入る。ハイドリック、メインとは水管又は水樋の義にて、其中に水

を半分程入れあり。レトルトより出てたる無数の鐵管は、その端をこの水中に開けるがゆゑに、新生の瓦斯は、必、この水中をくゞりて、ハイドリツク、メインの空處に入ることゝなる。

こゝにて、瓦斯中第一の雜物コイルタアは水中に残さる。此コイルタアは、漸次水中に積りて、管中に滿つるに至る理なれども、管の一方、水の高さの處に、ぬけ道を設けたるが故に、水量の増すに隨つて、それだけは外なるタアル桶に流れ出づるなり。コイルタアを去られたる瓦斯は、鐵管を通過して、次なる冷縮器コンデンサに導かる。冷縮器は瓦斯を冷す装置にして、U字形の數多の鐵管、蓋ある水箱の中に、入りては出て、

冷縮

出でては入れるが故に、瓦斯はこの管内を通過する間に、大概その熱を失ひ、且、残れるタアルやアンモニアの類を水中に置きて、一段清淨となり、排送器エキジクタの働にて、貯溜庫タンクの方に急送せらる。

レトルトより生出する瓦斯は、おのづから先へくと進み行けども、前記の如く、様々の狹道を通過するが故に、自然にまかせおくときは、其進行の度、極めて遅々たるは止むを得ず。かく、管内にて時間を費せば、抵抗より生ずる壓力の爲に、炭素を分解して、ガスカアボンといふ炭素の結晶を作るに至る。かゝれば、瓦斯は其要素たる炭素を失ひて、大に光力を弱くするのみならず、レトルトもその結晶炭素のた

均勢

めに熱を導く力不同となり、遂に破壊するに終るべければ、瓦斯はその發生次第、成るべく早くレトルトより吸ひ取り、成るべく早く各處を通過せしめて、猶豫なくタンクの方に送らざるべからず。これ排送器の要ある所以なり。

排送器はポンプの仕掛にして、壓力の均勢調和を破らざるやうに構造し、その働、瓦斯の全行路に及べり。

### 一三 石炭瓦斯 (その二)

さて、冷縮器によりて、タルおよびアンモニアを去られたる瓦斯は、尙、炭酸氣・硫黄等を含めるが故に、之を取り去る爲に、洗淨器<sup>ウォッシュ</sup>及、清淨器<sup>ペトリフアイ</sup>の中を通過す。前者は鐵の筒の中に

コークスを詰め、水を滴らしたるもの、後者は石灰および酸化鐵をみたせる鐵箱なり。清淨器を通過するに及びて、瓦斯は始めて本仕上となる。されど、炭酸氣の少量、及、酸素窒素のみは、竟に去らず、不用の物質ながら無害なるを以て、そのまゝに共に瓦斯タンクに送り込まる。

瓦斯會社の近くに往けば、大人國の帽子入れともいふべき、鐵製の巨大なる大圓筒のあるを見ん。これ所謂タンクにして、瓦斯の倉庫なり。前述の方法によりて精製せられたる瓦斯は、直に市中に送りて可なるが如くなれど、さに非ず。市中にて瓦斯を用ふるは、大概夜分にして、その量も夥しく、これをば夕方前より急に送り出さんことは、到底叶は



拂底

ざる次第なれば、製造所にては、晝夜の別なく、造りては溜め、溜めては造り、絶えず作業して、瓦斯を拂底せしめざる用意肝要なり。かつ、瓦斯は水道の水とは事かはり、低き處を求めて自ら流れ行く性にあらざるが故に、絶えずこなたより壓力を加へて、推しやらざるべからず。タンクはこの二つの目的によりて設けらる。

タンクの構造は、大なる桶を二つ合せたるが如きものにて、まづ鋼鐵板にて大なる槽を造り、之を地上に据ゑて、水を張りおく。さて内側よりこの槽に蓋するだけの稍、小さき槽を造りて、前の槽の水の中に伏せ、上よりおもりを下げ、之を壓下す。さて排送器より來れる二條の管は、下なる水

重壓

槽の底を穿ちて、水面に口を開けるが故に、瓦斯は追々こゝに溜りて、上なる水槽を押し上ぐる事、恰も肺量器に空氣を吹き込みたる時の如くなるべし。かくて夕方に及べば、瓦斯は溜りくゞて、タンクの蓋は其丈一杯に押し上げらる。さて、此タンクより導管出でて、地下をくゞり、市内の各處に通ずるが故に、瓦斯は上なる槽の重壓によりて押し出されて、導管の末端に出で、所謂瓦斯燈となりて各處を照す。

石炭瓦斯の使用法は極めて多し。最、普通なる燈火用の外、薪炭に代へて、或は室内を温め、或は炊事、煮焼をなし、或は風呂を涌かし、或は工場の蒸氣竈を熱する等、その便利數ふべからず。經濟上より云ふも、稍、大勢の世帯ならば、薪炭、石

低廉

油を用ふるよりは、遙に低廉なりといふ。

(芳賀矢一著明治讀本)

一四 越後より東京に

相識

肅啓。一昨日拂曉高崎を出發致候。劍閣の如き妙義蜀道の如き碓氷、その山光水色は幾回も相識に候へども、林樹が數十百日の間、氷風雪雨に圍まれたる後、青帝の救に遭うて、荒涼たる風景の中より稍、萌芽を生じたる風景は、天地生成の大勢力を示して、また自ら一種の美觀に御座候。

萌芽

輕井澤を過ぐる頃、拙者十七年前曾て歩行して此地を過ぎしを追憶して、舊時の追分驛の如何に成り行きしかを傍

荒涼

桑田碧海

人に問ひ候處、今は荒涼たる一村落と相成候由、聞く所によれば、追分の油屋なるもの旅籠屋にして、その盛時に方りては、二百五十人の雇人を使役致し候へども、幕府の制、一私人にして百人以上を役するを禁じたるが故に、九十九人と届け居候由、以て追分が以前は相當なる一市街なりしこと想像被致候。而して今や鐵道のため、桑田碧海の諺を眼前に示し、實にゴールドスマスの「荒村行」も思出され候。かゝる懷舊談を爲しつゝある間に、上田城を右方に見てうち過ぎ、坂城驛の後に一丘陵を見受け候。これは村上義清の城址なりとのことに候。拙者の祖先は村上一族清野より出て、義清と共に信玄に攻められて身を容るゝの地なく、謙信に

團樂

投じたるもの、よし傳へられ居候へば、此處もまた我故郷の如くに思はれ候。

郷里に入り候へば、雙親は例に變らず壯健にて、父は鶏巢に入りて卵子を取出し、母は臺所に出てて晚餐の用意を催され、家兄は爐にあたりて姪兒の頭を撫しつゝ、その學業を語る等、政治なく功名もなく、眞率なる家庭團樂の畫圖を現出致候。唯、家はもと市街の中にありしに、火災に罹りし後、市街を離るゝ三四町程の松林の間に建てられて、形容全く舊時に異り候。この松林は、拙者の幼時頑童を將ゐて雉子兔を追ひたる地にして、その颯々たる松風の音、切に當年を回憶せしめ候。

人は古い物は換れる故郷に

昔ながらの松風の音

歩を移して海濱に出づれば、處々尙殘雪あり。里の少女等、殘雪を搔分けて防風を採るを見受候。防風は三葉芹に似たる短草にして、その根は深く砂中にあり、白莖凡そ五六寸なるを砂中より取出して食ふ。その味淡泊にして一種の香味あり。この草を採るは亦拙者幼時の快樂の一なりし事に候へば、事々物々頑童時代を憶起いたし候。

少女等が殘んの雪をかきわけて

防風とる手に春風の吹く(下略)

(竹趣與三郎著、三叉手翰)

憶起

### 一五 航海

衝突  
およそ船舶の大洋を通過する時、その尤、懼るゝ所のものは、氷山もしくは他の船舶との衝突なり。すべて、船舶の夜行するには、強力なる綠色燈を右舷に、赤色燈を左舷に掲ぐるを常とし、汽船はまた別に白色燈を檣頭に掲ぐべき定規なり。兩船海上にて遭遇する時は、各道を右方に避くるを法とす。

緯度  
船舶の位置は、毎日、天象觀測に因りて定む。緯度を測る機器をセクスタントといひ、經度を測るものをクロノメーターといふ。

最短航路  
定期郵船

交通せんとする二地方間の最短航路は、勿論、地圖を閲して容易に定むることを得れども、これ、必ずしも、最、迅速なる航路にあらず。又、今日、定期郵船の採用する航路にもあらざるなり。何となれば、氷山との衝突を避け、又、順風に乗じ、潮流を利用する等の事情に因つて、屢、直路より離るゝことあればなり。

世界陸地の沿海は、諸國の軍艦に依りて測量せられたれば、水路部編纂の海路を按して、その深淺、港灣、暗礁等を明に知り得べし。されど、河口の如き、變化常なく、水勢、潮流等の極めて複雑なる處は、多く水先案内の指導によりて進航するなり。尤、なほ、安全の水路を示し、危険なる場處を警めん

浚港築

がため、別に浮標または燈臺を設置して、晝夜船舶の注意を惹くところあり。

良好なる港灣を有し、海岸線長き國は、通商貿易必、隆盛に向ひて、國勢伸張すべきなり。されば、天然の良港を有するのみを以て満足せず、多額の資金を投じて浚港築港の工事を施し、益、商業を奨励し、交通運輸の便に資することあり。

有名なるスエズ運河は、世界の通商に莫大なる影響を及ぼし、ものにして、孟買、ブリマス間の航路は、その昔、約一萬二千哩なりしを七千哩に縮少せしめたり。此の他、南亞米利加横斷の計畫は、先年より實施せられんとし、或はパナマに、或はニコロラガに、運河を通ぜんとすれども、種々の事情あ

りて未だ果さず。但、近年、後者ニコロラガ運河の成効は、稍、有望なりと聞けり。(明治時代文範)

一六 外來物産

本邦上世無菊、故萬葉集不載、詠菊歌。古今集、防有詠菊之歌。源順、和名鈔、不載於砂糖。蓋夫時、砂糖未來于我邦。下學集、節用集、既載之。則三百年前所來也。老學菴筆記曰、砂糖中國本無之。唐太宗時、外國貢至。自是中國方有砂糖。然則來於本邦、亦是可當于唐宋之間。如蕃椒、文祿年中、豐臣氏伐朝鮮時、其臣庶自彼土初携來。故俗謂

樗

之高麗胡椒。如木綿種子、亦文祿時自外國來。烟草種子亦然。西瓜、寬永末年來。如秋海棠、正保年中來。如椿樹、本邦初無之。寬文年中、自漢土來。樗亦椿類、是本邦素所有也。如臘梅、茶、蘭、千日紅、美人蕉、皆近年自外國所來也。

(貝原益軒)

美術

わが國の進歩と、歐米諸國との進歩との差違は、いづこにありや。此問題につきて、余は嘗て、例を衣服、住居、生活、美術、音樂等の上に取りて、その差違は、これを約言すれば、内外の二字に歸すといふことを述べたりき。こゝには、更に例を

一七 公の禮義

禮儀と道德との上に取りて、この區別を説明せんとす。

挨拶

わが國にては、内の禮儀まことによく發達せり。試に之をいはんか。その人を訪問するや、まづ寒暖の挨拶を述べ、互に席を譲り、再三再四辭讓して後、さて、はじめて椅子に倚り、或は座蒲團を敷く。然も、その坐作進退には、小笠原流、何流などいふ式ありて、一々嚴格なる法度を守らざるべからず。殊に、茶の湯などに至りては、その内の禮儀の發達せること、まことに驚くべきほどなり。さて、さらば外の禮儀はいかにといふに、こは殆ど何の禮儀もなしといふも可なるほどなり。試にかの葬式の折、會葬せる者の讀經、弔詞などの終りて、今や焼香し、或は玉串を捧げんとする際に見よ、平

玉串

靜肅

生、小笠原流の式を守り、茶の湯の作法を奉じて、内にありては、うるはしき禮儀を行へる人々の、今この、最、靜肅を要し、最、悲痛の情を表すべき時に當りて、何事ぞ、互に押しあひ突き除けて、あわたゞしげに、柳を抛け、香を投じて、さて逃げ歸るが如き行をなすにあらずや。

去つて、之を歐米諸國に見よ。國々によりて、そこに多少の相違あれど、すべて皆その禮儀に一定の法式あり。例へば、道路を行くにしても、其禮儀は至つて正しきが如し。前方より人來れば、われ、必、右に避く。又、人と連立ちて行くに、その人わが先輩か、もしくは年長者なれば、必、その人を右の方に据ゑて歩む。かの紐育倫敦などの市中の如く、雨天の

肩摩  
穀擊

日にも、傘をさしては歩行すること能はざるばかりなる、いはゆる肩摩穀擊の境にありて、その市街に數千人の相往來するを見よ。右側を行く者と左側を行く者と、整然として相分れ、そこに些の混雜なく、そこに些の喧嘩を見ず。この一例を推して、以て萬事を思ふべきにあらずや。

劇場  
順次

余嘗てかの國にありて、劇場に行けることありき。いづこも同じ習にて、最、場代の安くして、しかも、よき場處へ入らんとするには、早く行きて開場の時の來らんを待たざるべからず。かくの如くして、余はその戸の前に立ちつゝありしに、後より來れるもの、順次、余の後に立ちて、往來の人の邪魔にならぬやうに、長き列をなして、さて靜に戸の開くを待

鯨波

つなりき。かくて、いよく戸の開く時となれるに、もし、わが國ならば、こゝにわれ勝ちに鯨波を作りて、切符の賣り場に押し込むなれど、そこには少しもさる喧囂なく、各、その順序を守りて、靜に次を追うて場に入れり。劇場にて、最も安き場代の處に入らんものは、いふまでもなく、皆、下等の賤民なり。然もその禮節あることかくの如し。また、學校にて教師が生徒に札を渡すを見たることありき。その時、生徒は一人づつ出でては札を受け取り、餘の生徒はみな右の手を隣の生徒の肩に掛けて、列をなして靜に並び居たりき。まことに公の秩序を守り、行儀を好くすといふ風習は、下等社會、小兒等の上にもまでも發達し居ること、かくの如し。

毆打

英國人は、容易に帽子をぬがざる風あり。されど、行き合へる時、もしすこしにても肩などの觸るゝことあらば、「アイ、ベッグ、ユリア、バーツン」といひて、首を下げて丁寧な挨拶をなすなり。英國の刑法によれば、毆打といふは、決して打擲のみ指すにあらで、たとひ指一本なりとも、他に著くれば、直に毆打となるなり。乃、英國人が指一本をも決して他に著けざることを知るべきにあらずや。いやしくも、人間が公の生活をなして、多數の人と交際を圓滿にせんとならば、公の禮儀たるものをして、そのまことの發達をなさしむるにあらざれば、到底能はざることなり。古の聖人の、禮といふものを教へたるは、まことに禮なければ交際の成立せざる



ことを見ればなり。わが國人たるもの、よくこの理をわ  
きまへて、つとめて公の禮儀を發達せしむることはから  
ざるべからず。(穂積陳重)

風

一八 相模灘の落日

秋冬風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に  
落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとも  
思はれず。

日の山に落ちかゝりてより、その全く沈み終るまで三分  
時を要す。

はじめ、日の西に傾くや、富士を始め、相豆の連山、煙の如く

爛々

薄し。日は所謂白日、白光爛々として眩きに、山も眼を細う  
せるにや。

日、更に傾くや、富士をはじめ、相豆の連山、次第に紫になる  
なり。

日、更に傾くや、富士をはじめ、相豆の連山、紫の肌に金煙を  
帯ぶ。

この時、濱に立つて望めば、落日、海に流れてわが足下に到  
り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱、山といはず、砂と  
いはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉がりたる生簀  
の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。

斯る風の夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍する

臨終

融然

感あり。莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて、肉融け、  
靈、ひとり端然として永遠の濱に在るを覺ゆ。

物あり、融然として心に浸む。喜といはんは過ぎ、哀とい  
はんは未だ及ばず。

已にして、日愈落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山、忽に  
して印度藍色に變ず。唯、富士の嶺、舊に依りて紫上更に金  
光を帶ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜み初めぬ。日、一分を落つれば、海  
に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分  
別れ行く世をば顧みがちに、悠々として落ち行く。

已にして殘一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて

線となり、線瘡せて點となり、忽にして無し。

遺孽

眼を上ぐれば世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然と  
して憂ふ。日は入りぬ。然も餘光の、忽、箭の如く上射し、西  
空、金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿後、實にかくの如し。  
日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金  
は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃き孛藍色となり、  
日の遺孽とも思はるゝ明星の、次第に暮れ行く相摸灘の上  
に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。

(徳富蘆花著、自然と人生)

一九 北海炭鑛

北海産煤處、曰幌内、曰岩内。岩内距札幌僅二十六町。慶應中、幕府雇洋人開採、府廢事寢。近年、官復使米國鑛師某氏遍檢諸坑、亦以此爲良坑。曰煤質宜爐用、掘地深及四千英尺、當獲三千八百五十五萬噸。乃聚徒起工。明治十三年一月、坑内發火、引溪注水、至九月始色。更開大坑道、建官舍藥庫。幌内在札幌北東十八里、廣袤里許、煤炭七層、各厚四尺餘。據米國鑛師言、一坑中有一億餘萬噸之多。鑛脈通犇別、郁春別、其所蘊藏又巨萬。但地距海口遠、不便搬運。因開鐵路、路長九里十六間、四尺架長橋五、鑿寶道五。川田剛

## 二〇 佛國の良農村マローサン

充實

一人の勤勞はその一家を潤し、協同の勤勞はその一郷を潤す。かくて小を積み、大を成し、國力充實す。知るべし一國の富は、全く國民各自の勤勉と、其の協同の精神とより來ることを。然れども、事の擧る、必ずや先覺者を要し、又指導者を須つこと多し。平生、世に望むべきもの、甚多しといへども、自ら先んじ自ら勞するの人、甚少きを遺憾とす。もし、一たび己を捨て、世を益せんとする者ありて、自ら社會の中心となり、又能く一郷の人々を指導するならば、一般の風を興すこと、亦敢て難しとせず。

先覺者

協會

頃日、佛國の「社會改良協會雜誌」を閲せしに、頗る感ずべき一節あり。そは、佛國エロール縣なるマローサンといへる農村の活動せる事績是れなり。同村はベジェー市を距る北方一里半の地に在りて、人口一千九百餘、其面積千二十餘町歩を有し、その地籍の九分は葡萄園なり。地は肥沃にして、民は殊に勤勞の美風に富み、又協同心に篤し。されば、その産出する葡萄の如きは、酒に醸造して之を輸出し、一村の經濟は、夙に之に依りて支持せられしも、而も未だ共同販賣の方法を設くるに至らざりき。

然るに爰にベジェー市の篤志家にて、エリー、カタラーといふ人あり。マローサン村には姻族故舊を有し、資性剛毅

肥沃

眞摯

逆境

にして眞摯、嘗て政界に奔走せしことありしが、醜然として高談空論の社會を益することなきを悟り、公益事業を起さんと志せり。時、偶、葡萄耕作業の所在悲境に陥りしことあり、マローサンの農村も亦その影響を蒙りて難色ありき。氏はこの情誼ある村邑を逆境に救ふことは、自己の任務なりとなし、その方法として、同村に「葡萄酒醸造販賣組合」の創立を企圖して、數回の誘導を重ね、遂に小地主百二十一名を糾合して、之を組織するに至れり。これ實に一村の經濟力に一大活勢を與ふるの動機なりしなり。かくて、漸次事業の進行を見たりしも、狹隘なる一村にして、葡萄酒の販路市場たるの難きを感じ、勤勞の精神を鼓舞して、自ら東奔西走

顧客

し、以て顧客を求むるに努めたり。されば、巴里の消費組合の如き、該組合の確實なるに信賴して、續々注文を爲し、かば、需用も頓に増加し、組合員も日を逐うて多きを加へ、能く一致協同して葡萄の耕作に勤勞を捧げたり。

カタラー氏は自ら販賣掛の劇職に任じ、組合規定の明文に依り、葡萄酒一エクトリートルに就き半法の手數料を受け、現に千九百六年度には二萬四千六百法を受けぬ。然れども、氏はその手數料の全額を擧げて、之を組合事業の擴張費に寄付し、尙餘分の収入を得るときは、其金額を蓄積し、以て不幸なる組合員を賑恤するの用途に供せり。その篤志、實に感ずるに餘ありといふべし。

閩村

かくて、勤勞の美風は閩村に普く、カタラー氏の熱誠なる扶掖誘導は、着々として其の効果を奏し、遂に倉庫を建設して葡萄酒の貯藏に便し、更に農夫組合を設けて葡萄園を買入れ、之を共同耕作せしめ、又、消費組合を設けて農民各自の利益を圖る等、苟も一村の福利を増進するの計は、總て其企畫を見ざるなし。されば、此等物質上の利益を目的として起りたる施設も、今や精神的の方面に於ても、著しき効果を顯はせり。組合員は、組合の命令を道德上の義務として、之を尊重し、農夫、職工、及地主等も、亦、能く結合して些の杆格あるなし。是に於て進んで庶民教育に資するため、ベシエー及モンペリエー兩市の庶民大學より講師を聘して、庶民講

杆格

推讓

演會を開設するに至れり。かくて、マローサンの名聲、四方に傳はり、佛國著名の學會たる社會改良協會は、特に委員を同村に派して、同村の經濟上、及精神上の影響を調査するに至れり。念ふに同村のかく事績を擧ぐるに至りしは、一にカタラー氏が推讓の美德能く一村を啓發したるに由るは言ふを俟たず、されど、又、全村の農民が、能く協同一致して勤勞に勵みたるの結果たるを疑はず。

業は勤むるに成り情るに荒む。しかも一人の勞を萬人に及ぼせば、積んでは國家の大富源ともならん。予は、全國の都會、及農村に向つて精勵の二字を望み、又、指導者有志家に向つては、エリー、カタラー以上の熱誠を望むこと切なり。

(吉原三郎)

志士(白し)命(命)を(命)す

二二 高德題櫻樹

兒嶋高德稱備後三郎。後醍醐帝之在笠置也。高德欲赴援。聞笠置陷。楠氏敗。乃止。已而聞帝之西遷。高德謂其衆曰。吾聞志士仁人。有殺身以爲仁。見義不爲無勇也。盍要駕以舉義。衆奮從之。伏舟阪山而待。久之不至。遣人候之。曰。駕向山陰道。乃間道至杉阪。則已過矣。衆乃散去。高德悵恨不能去。乃變服尾駕而行。數日。欲一見帝。有所言而不得。間於是夜入帝館。白櫻樹而書之。曰。天莫空勾踐。時非無范蠡。且日護兵聚視不能讀也。乃奏之。帝熟視之。

欣然心知有勤王者也。(賴襄)

四季折々

(一) 櫻花の時節

春宵一刻千金の値ありといはんより、寧ろ春日一刻千金の値ありとこそいふべけれ。

春風は枝より枝を吹けり。東台の櫻花既に三分の紅を潮せんとす。

而して、人は麗和なる春天の下に舞はんとす。

「世の中に樂しきものは思ふどち花見て暮すなりけり。親友相携へて花間を傲嘯逍遙す。世上寧ろこれに比

傲嘯

するの快樂あらんや。

(二) 五月五日

鯉幟は都門の各處に翻れり。端午の節は來れり。簷前菖蒲を挿むもの又幾何を見る。

國民に祝節なきは快樂なきなり。吾人は強ひて端午の佳節を保存せんとせず、唯、これに換るものを得んと欲す。もし舊禮にして保存する甲斐なしとせば。

梁川星巖翁句あり。「可笑無錢買栢杓、獨將醒眼讀離憂」と。知らず、今日に於て何人か此の如きと。

離憂

(三) 綠陰幽艸

新綠滿天、復た滿地。恰、宇宙の水彩畫を觀るが如し。

仔細に點檢すれば、濃翠あり、淡緑あり、茶褐色あり、微卵色あり、その色彩の配合いふべからざるの妙趣あるを見る。「緑陰幽艸勝花時」もの、必ずしも詩人の負け惜しみといふべからず。

勃々  
落々

新緑を以て黄葉に對す。一は大なる未來を豫測し、他は大なる過去を先知す。一は生意の勃々たるを見、他は老熟の落々たるを示す。與に、反映の妙觀たり。

(四) 梅雨

梅雨絲の如し。

最下層の東京人士は如何に困り入りたりたむ。縁日も出來ず、祭禮も出來ず、大道見世も出來ず。

穰々

併し、新穀穰々、黄金の野を蜻蛉州の首尾に現出するも、また梅雨の賜物なるを思はゞ、以て、聊、休すべし。

蒼々

特に、高きに登りて東京全都を望めば、新緑蒼々、烟靄模糊の間にあり。恰、これ、雲裏帝城、双鳳闕、雨中春樹、萬人家の趣を見る。以て天地の美を歌ふべし、知らず、紅塵何の處にある。梅雨は實に凡俗なる東京をして、深雅なる東京と化せしめたり。

(五) 梅雨、雨なし

猛然

節、梅雨に入りて、既にその三分二を經過せり。長天、雲なく、人間、雨なし。炎熱猛然として人を蒸殺せんとす。



炎熱人を蒸殺せんとする、なほ忍ぶべし。忍ぶべからざるは、稲苗の植附をなし能はざること、これなり。

(六) 一滴千金

驟然。これ、天、珠玉を降らす也。天、百穀を降らす也。天、豊年を降らす也。

一滴の涙、千金の價値あり。これ詩人的數理より割り出したるもの。

一滴の降雨、千金の價値あり。これ經濟的數理より割り出したるもの。

況や千萬滴に於てをや、況や沛然、油然、滔々然たるに於てをや。これ、天、千萬金を降らす也。

驟然

沛然  
油然  
滔々然

蒸々

(七) 心理的消夏法

暑氣蒸々、人を襲ふ。「柱にも壁にもよれぬ暑さかな。」

几に憑り、涼味を想ふ。窓外の梧桐、風死して、晝、亦、眠る。

「桐の葉に埃のたまる暑さかな。」

何を以て暑氣に勝つ。剩す所、唯、心理的消夏法あるのみ。

古人いはずや。北風圖を壁上に懸くれば、盛暑人をして續を挟ましめんことを思ふと。

暑中に寒死し、寒中に熱殺す。心理の作用も、亦、玄妙ならずや。

玄妙

(八) 暑中の快樂

暑中の快樂は、曉早にあり。河漢未だ淡からず、星斗未だ

珊瑚

珊瑚たらず。殘月微茫、風は池面の荷葉を揺かして、時に蓮花の發くを聽く。

暑中の快樂は、午睡にあり。孟宗竹六七竿、籐床一個、風死し草臥す。試に書を枕にして横臥すれば、夢は早や義皇以上の時に入る。

暑中の快樂は、晚景にあり。大月、風呂桶よりも大に、松影地上にあり。

涼棚の上、老幼相對し、鬼を説くも可、人を説くも亦可。

(九) 北海道の避暑旅行

花は吉野、月は石山といふ昔に引き換へて、避暑旅行としては、北海道に出掛くるもの、目下の流行なり。旅行として

土産演説

は、決して悪しき旅行にあらず。英國政治家の如きは、選舉區民に向つて面白き土産演説を爲さんが爲に、寧ろ其材料を求めんが爲に、阿非利加、東洋諸州に遊歴するものあり。

吾人が、最、希ふ所は、恐れ多くも天皇陛下の北海道に行幸し給はんこと、これなり。少くとも、例年の避暑旅行を爲し給はんこと、これなり。羊蹄山頭の月色、石狩川邊の清風、陛下の聖躰を安んじ奉るのみならず、北門拓殖の點に就いて、計算外の利得あるべし。世、もし通識の君子あらば、必、吾人が言を河漢にせざるべし。

河漢

(一〇) 月光

大月、水精盤の如し。萬斛の涼味、この中より滴るを覺ゆ。

貳貅

「涼しさの塊なれや夏の月」。  
遙に想ふ、清光は、牙山の野に横りたる我が先登第一の勇士の尸を照すべし。龍山營外、慘として驕らざる貳貅の顔を照すべし。

有情の人

海より出でて海に入る一片の氷影は、渤海灣頭、幾多身を忘れて國に殉する有情の人を照らすべし。  
抑、亦、牀前獨座、金閨萬里の怨を照らすべし。

(一一) 菊花

菊は、花の隱逸なるものなりと。然れども、東京に於ては、菊は花の富貴なるものならんとす。

異葩奇蕊

異葩奇蕊、これを培ひ、これを養ひ、油窓これを蔭し、紫幕こ

乾坤

れを掩ふ、美は、則、美なり。然れども、茅屋の傍、荒籬の下、枝葉横生、黄菊、白菊、露を帯びて開く。「黄菊白菊その外の名はなくもがな。」菊の、天真、寧ろこれに如くものあらんや。

(一二) 冬の景色

「山骨稜々雪外青」二句、冬景を括盡す。

冬景の愛すべきは、自然の裸躰なるにあり。野も山も川も木も、皆、その衣服を脱ぎ去りて、赤條々となるにあり。彼等、皆、赤條々たり、故に野も山も川も木も、皆、各、その特色を發揮するなり。

春酣に、夏淺し。青葉重々、野も山も川も木も、否、乾坤萬里、皆、青のみ。これ固より悦ぶべし。然れども、天然の眞美は、

寧ろかれにありてこれに存せず。

● (二三) 雪

續紛

飛雪續紛。東京百萬の人家を白盡せんとす。

想ふ、昨年二月廣島にあり、雪に對して懷を叙して曰く、

廣陵二月雪紛々、城上角聲衝凍雲。

遙想皇師征朔北、苦寒墮指不忘君。

嗟呼、即今、韓山の風雪如何。抑亦、西伯利亞の風雪如何。

(徳富猪一郎)

二三 信用組合

凡、人の此の世に生るゝからは、衣食住に不足せざるは勿

天壽

論、其身に相應の生活をなし、父母を養ひ、子孫を育て、天壽を全うせんことを謀らざるべからず。人は萬物の靈と云ひて、世にある物の中にて、これほど賢く、又、貴き者なし。そは、唯才智の萬物に優れたるのみにあらず。其天性、忠孝の道を辨へ、信義を重んじ、國を立て、家を治めて、人の人たる道を盡すが故なり。されど、國には納税の義務あり。家には衣食の費あり。親戚朋友に交はるにも、皆、それらの費用なくしては濟まず。若、是等に充つべき備のなからんには、人の人たる道も、亦、盡すこと能はざるべし。故に此備を爲さんには、何人も、常にそれらの業務を力め、須臾も怠るまじきなり。

納税

須臾

偏強

さて、如何なる産業にても、物を造り出さんには、天然と勞力と資本との三を缺くべからず。田畑の作物も、日光を受けざれば生長せず、鋤き耕し、肥料を入れざれば、實ることなし。されば、よしや豊かなる天然の土地を備へ、偏強なる勞力を出したりとも、若し資本なかりせば、之を用ふること能はざるべし。況してや、日に月に進みゆく今の世にありて、新なる機械、方法を用ふる者は、愈富み榮え、之を用ふる能はざる者は、世にも人にも後れ行きて、終には貧困のきはまりに沈み果てぬべし。然るに、是皆資本のあるとなきとに由る事にて、何事も、資本の支配を受けざるべからざる世に在りては、是非もなき事なり。されど、貧しき者は、抵當とすべき

切迫

物なければ、資本を借る道なく、よし借り得るも、利子高くては、損益償はざるべし。故に、低利にて返済期限切迫ならざる資本を得べき道を求めんことは、小民の産業にとりて、急務なりと謂ふべし。而して斯くの如き資本を得る途は、信用組合の法を設くるに如くものなし。

信用組合は、多人數相集りて組合を爲し、少額の財を持寄りて之を一にし、互に借り合ひ、貸し合ふものにして、各人にとりては、誠に僅の高なれども、集めて一とすれば、一廉の資本となりて、之を借り得たる人は耕作の肥代ともなし、養蠶の桑代ともなして、少からぬ利益を得べし。然るときは、貧しき者も、容易に資本を得る道ありて、各、應分の事業を起し、

相應の生計を營むことを得べし。是れ資本に乏しき小民のためには、信用組合の最、必要なる所以なり。茫々たる大海の水も、元は溪間の一滴なり。穗に實る粟粒も、之を積めばこそ、幾萬石ともなるなれ。唯、慎みて無用の費を省き、一錢にても積立て、其業務に用ひなば、家もなとて富まざらん、國もなとて榮えざるべき。(平田東助)

二四 愛日

志士愛日蓋懼百年之期難保而時日之逝易過萬端之事繁重而進修之功難成也而人生最當愛日之時有二焉其一幼弱之時記憶與精力俱盛故博聞強記之功

強記

優游

易成一記誦則終身不忘此時精勵則一日之功可以當十日此學者當愛日之時也其二少壯之時父母既老不能久侍養是以定省之功不可一日怠廢此人子當愛日之時也其三老境衰殘之日躬既致仕則無公事無監之勤勞方此時須思其死期之迫近而日日娛樂優游終身此老衰當愛日之時也夫善勤勞善娛樂者君子一張一弛之事以一時為一日以一日為十日以一年為十年是愛日也。(貝原篤信)

古事熟語

青雲(史記)

推輓(左傳)

挂冠(後漢書)

素封(史記)

盡瘁(詩經)

數奇(史記)

### 二五 巴里的美術館

美術館として、最、名高きはルーブル博物館なり。これはルーブル宮殿を、そのままに館としたるものなれば、その建築のみにて、美術上、特筆すべきものたり。こゝに陳列したるは、その重なるものを繪畫及び彫刻とす。その點數は萬を以て數ふべく、五日十日の時を費したりとて、素より觀畢ふべきにあらず。

陳列

彫刻は遠き亞西利亞・波斯埃及・阿刺比亞・希臘・羅馬の昔よ

り、降りて佛國十六七世紀、及十八世紀の初期にいたる。各室を異にし、類を分ち、悉く概畧の説明を附して、たとひかゝる道に暗き人にて、その大體を悟り得るやうにせり。されば埃及・亞西利亞等は更なり、希臘・羅馬の如き、やゝ似かよひたる彫刻は、吾々素人にて分別し難きやうなるも、この各室に入れば、一目してその相異なる所あるを認め得しむ。又、十七世紀より十八世紀の初期に接する間のごときは、恰春より夏に移るごとく、漸くかはりゆくさまあらはれて、その妙いふべからず。

繪畫はその數、殊に多し。これ本館中にて、最、見るべきものなり。伊太利派の古代・中代・フランマン派和蘭派、さては西

泰斗

班牙派獨逸及英國近代又佛國十六世紀以後今代にいたるまでのもの、各數を分ち種を別にして陳列せり。されば伊太利派の室に入れば、シマビユー、ジョツドなどいふ人の手に成れるものをも容易に見らるべく、又、フラマン派の泰斗、油畫の祖ともいはるゝジョンハンエーキの筆にも接し得べし。まして當國なるは、クロード以下大方の名家の畫、悉こゝに陳列せらる。

これらは孰れも別に精目錄及び略目錄ありて、引合せ見る時は、誰人にも、その筆者の何年代の人にして、何派に屬せしかをも詳にすることを得れば、美術にさまで心入れざるものも、一たびこの館に入らば、おのづからその方に導かれ

王冠

ぬべし。

この館には、奈破翁皇帝の王冠、太刀を始め、寶物も頗る多く、又、戰艦、及、商船の雛形、東洋諸國に於ける農工商用等の雜具をも陳列せり。然れども、その主たるは彫刻、繪畫に在れば、世には美術館として名を知られぬ。

これに次ぎて觀るべきは、リュクサンブル博物館なり。こは當代名家の彫刻、繪畫等を陳列する純然たる美術館なり。されば一たびこゝに入れば、佛國美術家の技倆は手に取る如くに請取らる。要するに、ルーブルには天下の名畫、名刻を集め、こゝには現今佛國の名家のを集めたるなり。

名畫名刻

(池邊義象著「佛國風俗問答」)



二六 海水浴

盛夏之候、都會炎熱、紅日如燒、宜避暑海濱、以浴潮。不獨養病、大益於身體。蓋海潮有硬皮膚之效、兼可宣暢呼吸也。選其地、必求面南背岡、波靜氣和、水底砂細、少巖石、貝殼處、浴焉。身著網短衣、戴麥稈帽、以防日光。然後游泳久之。若疲倦、或身冷、宜去伏熱沙、取溫、再入、復出、如此者數、浴罷、以乾布摩擦全身、自覺爽快也。

游浴之度、初一日、要一度、莫多浴。病憊之體、最慎之。無病者、一日二三度最好。然時間自午前八時、至十一時、要浴五分、乃至三十分為限。食後非經一時、不可浴、以其激

動胃腑也。凡海濱、與山中溫泉、所出不同。青松白砂、宜於散策、無登頓之勞。加以大氣清新、不蓄瘴氣、及毒瓦斯。故可以健四肢、舒氣息。又或駕舟垂釣、浮拍弄潮、少年輩借以養勇鍊氣、皆浴潮之效也。 (依田百川)

二七 地球の未來

般鑑

地球の未來は如何。之を知ることに難きに非ず。般鑑近くは月にあり。地球は昔より漸次冷却し來り、今後と雖、尙絶えず冷却すべし。是、正にわが地球を滅亡の域に誘ふものに非ずして何ぞや。その故如何と尋ぬるに、吾人生物が地球上に生活するは、決してその内部の熱に頼るものに非

裂罅

ずして、全く太陽より放つ光熱の餘恩に頼れり。故に地球が單に冷結するのみならば、其冷結はその中心に達するも敢て憂ふるに足らずと雖、この冷結の結果として、必、氣水吸收のこれに伴ふものあり。これ實に恐るべきものとす。地の中には、到る處多少の水あるは、人の能く知る所なり。井戸の水あるは、地中に水あればなり。隧道に水滴るは、地中に水あればなり。鑛山の坑内に水多きは、これ亦、地中に水あればなり。今、この水は、皆、地上より岩石の裂罅・孔隙に沿ひ、浸入するものにして、岩石の存する處には、影の物に隨ふが如く、必、多少存在す。然るに、現今にありては、地球の内部、甚、熱きが故に、地の底三里以上の深さには水は最早<sup>浸</sup>進入

熔液體

風化分解

すること能はず。進入せんとしてこゝに至れば、高熱の爲、忽、温められて、水蒸氣となりて上昇す。然るに、地球冷却の結果、其内部漸く岩石を増すに至れば、これに連れて、水、益、<sup>進</sup>入し、遂に地球を全く冷却し了るの時には、現今、地上にある水は、盡くこゝに吸收せらるゝのみならず、又、岩石を組み成せる鑛物中にも吸收せらる。即、この鑛物中には水を化合的に含むもの多し。故に、地球内部の熔液體より、新に岩石成立すれば、その中の鑛物は、勢、多少の水を吸はざるべからず。これ一見、甚、少量なるが如くなれども、時久しきに互れば、又著しく地上の水を減少するならん。大氣中の瓦斯も、亦、同じ。岩石、風化分解すれば、炭酸石灰

化合物

炭酸苦土炭酸鐵等の如き炭酸化化合物を生ずる者なり。これが爲、大氣中に存する炭酸瓦斯の消費せらるゝもの、實に夥しとす。又軟體動物、珊瑚、海膽等の如き、その骨格（骨格）介甲を作るに、炭酸石灰を要するものは、海水中より炭酸瓦斯を取ること多し。この瓦斯の、最多量を費すものは植物にして、植物は空中の炭酸を吸ひ、その炭素を取りて、木纖維を形造るものなり。而してこの炭素の一部は、植物腐敗の際、再び炭酸となりて、空中に歸り去ると雖、その大部分は石炭と變じて、固く地中に繋留せらる。又、空中の酸素は、鐵及、亞酸化鐵と化合して、酸化鐵となり、酸化鐵は後更に水と化合して、水酸化鐵となる。故に地上の炭酸と酸素とは、絶えずその

纖維

繋留

熔岩

量を減じつゝある者にして、これ、亦、一見、甚、些細なるが如くなれども、年月久しきに互れば、その結果に著しきものあらん。唯、今日まで、その成行の明かならざるものは窒素なりとす。故にこの瓦斯のみは、水炭酸、及、酸素の、地上より消失せし後と雖、尙、跡に残るなるべし。

前に述べたる所に依つて觀るときは、水および大氣の減少は、地球の冷却と共に免るべからざる災厄なりとす。然るに、幸にも、爰にこの減少を多少補ふものあり。そは他ならず、地球内部の水蒸氣と瓦斯となり。これらが、地球内部の熔液體中に夥しく吸収せられ居るは、現に火山より流出する熔岩の證據立つる所にして、實に其冷結する際には、多

供給

轍を踏む

量の水蒸氣と瓦斯殊に炭酸瓦斯とを放出するなり。因つて地球が全く冷結するまでには、その内部より莫大の水と瓦斯とを出すべし。故に地球冷却の結果として、一方には水、酸素および炭酸の消失あるも、一方には、又、是が供給あり。然らば則、この供給の分量は、果して消失の分量を償ふに足る者なる乎。この點に就いては、吾人疑なき能はず。まづ彼の火星を見よ。彼は我より小にして、且、太陽を距る、われより遠ければ、諸般の状態われに一步を進めたるの觀あり。而してかの面には氣、水、共になきに非ずや。これを以て推すときは、わが地球も亦、蓋、彼等の轍を踏むものなるべし。

(横山又次郎)

### 二八 地方政治の一斑

諸君は、日本が、武藏國、もしくは薩摩國、もしくは陸前國といふが如き、八十餘州に區別せらるゝを知るならん。これ、古來、山河の自然の勢によりて、日本を區別したるものにして、之を名けて地理上の區分といふ。

内閣諸員は、日本國に政治を施すに方りて、四千萬人の國民に向つて直接に命令談話する能はざるが故に、國民と中央政府との間に立ちて、命令を受けつぎ、民情を上申し、またはその權限内に於て、臨機の處分を爲すの官職あるを必要とし、以上の八十餘州を、或は合し或は分ちて、四十餘の府廳。

臨機

内閣

縣廳を置く。その主長を知事とし、一府縣をまた數個に分ちて郡とし、一郡もしくは二郡に郡役所を置く。郡役所の長を郡長とす。

以上の府・縣・郡を名けて行政區劃といふ。行政上の便宜の爲に、日本を區分したるものなるが故なり。郡の下に、市・町・村あり。純然たる自治體とす。知事は、内務大臣の監督を受け、他の各省大臣の指揮を奉ず。知事の下に書記官・視學官・參事官・警部長あり。是皆課を分ちて、中央政府同様の風にて、それら事務を取扱ふものとす。

この地方の政府は、何事を爲すかと云ふに、道路・橋梁の修繕・郡・市・町・村の經濟・官有地・備荒儲蓄・監獄・議員選舉公共組合

自治體

實務

移牒

選舉

衛生・警察等に關する事務を取扱ふものにして、民政の實務は此に在りといふべし。その他、中央政府と人民との間に立ちて政務執行の任に當り、人民の願届等、一に此處を經由せざるものあらず。故に知事の權力も、亦甚大にして、臨機の處分を要する場合には、軍隊に移牒して出兵を請ふの權あり。部内判任以下の官吏は、之を獨斷黜陟するを得。

右の行政機關に對して、更に帝國議會と同様の議會あり。即、府會あり、縣會あり、郡會あり、而してまた市に市會あり、町・村に町・村會あり。市會・町會・村會の議員を選舉するの權を有するものは、滿二十五歳以上にして一家を構へ、二年以來その市若くは町村の住民となりて、幾何にても地租を納め

政黨

若くは直接國稅二圓以上を納むる者に限る。右の選舉權を有するものは、また議員に選舉せらるゝの權利を有す。また、右の市町・村會の議員選舉權を有するものにして、一年以來、直接國稅三圓以上を納むるものは、府縣會議員を選舉するの權あり。而して府縣會議員に選舉せらるゝの權あるものは、右の選舉權を有するものにして、直接國稅十圓以上を納むるものとす。これ等の議會は、大政に要する所の大才を集むるところにあらず、管内の水利・土工・共有・財産の管理等の事業を議するものなれば、勤勉・細心・眞に管内人民の痛苦・便益を考ふる郷紳士を選舉せざるべからず。故にこれ等の議員を選舉するに方りては、成るべく政黨の紛

評議

争を加へざるを可とす。

これ等の地方議會が、中央議會と異るところは、その議員中より參事會員なるものを選出して、府縣郡市の行政事務を評議するの一事にありとす。この制度あるがため、地方の行政事務、多く地方人民の手に移り、今や地方は殆ど全く人民自治の實を擧ぐるに至りたり。

裾野

富士山の高きも、その基礎は人の注意せざる裾野の土砂にあり。國家の大なるも、その基礎は却りて府縣町村にありとす。昔、漢の文帝は、朕と共に國を治むるものは、良二千石あるのみ」といへることありき。良二千石とは、善良なる地方官といへることなり。また、歐米各國に在りても、名あ

退隱

る大政治家の、繁劇なる社會より退隱するや、往々にして自ら地方議會の事務を助くるもの少からず。諸君も、また、深く地方の政務に留心せざるべからざるなり。(竹越與三郎)

二九 希望

沖の汐風吹きあれて、  
白波いたくほゆるとき、  
夕月波にしづむとき、  
黒暗くろみよもを襲ふとき、  
空のあなたにわが舟を、  
導く星の光あり。

ながき我世の夢さめて、  
むくろの土に返るとき、  
心のなやみ終るとき、  
罪のほだしの解くるとき、  
墓のあなたに我魂を、  
導く神の御聲あり。

嘆きわづらひ、くるしみの、  
海にいのちの舟うけて、  
夢にも泣くか塵の子よ。

浮世の波の仇騒ぎ、  
 雨風いかにあらふとも、  
 忍べとこよの花にほふ、  
 港入江の春告げて、  
 流るゝ川に言葉あり、  
 燃ゆる焔に思想あり、  
 空行く雲に啓示あり、  
 夜半の嵐に諫誡あり、  
 人の心に希望あり。

明治實業讀本 卷の五終

明治四十二年二月十九日

印刷

明治四十二年二月廿二日

發行

明治四十三年三月二十日

再版發行

明治實業讀本全八冊

定價 金貳拾五錢



著者

發行者

印刷者

印刷所

中村康之助

泉屋清次郎

森山章之丞

綾部喜久二

宮本印刷所

發兌

大賣捌

東京市神田區表神保町二番地  
電話本局四三三七  
振替貯金口座東京一一三五九

同文館

東京神田 東京堂

東京牛込 同文館支店

大阪東區 寶文館

韓國京城 日韓書房



広島大学図書

2000054291

